

袖日記

長次丸

伊地知文庫

文庫20

188



文庫20  
188

連預比況集  
七にをほ口信

冷泉中納言為久

古志書切急

其作のや、此るうへも君をそと

三つ扇をうらもえしうしあま

古志海軍けいあ

二つ扇をうらもえしうしあま

や、此るうへも君をそと

古志海軍けいあ

君のうらもえしうしあま

や、此るうへも君をそと

古志海軍けいあ

山十



二 五尺草蒲

連舟をこゝに結ばせしむるをいへりし如  
かといふは、こゝに結ばせしむる

三 夜船相

奇を題乃字は、元定を奇といふは、用舟より  
字は、立舟并舟をいふは、元定を奇といふは、用舟より  
重なる柱に舟つ尻南中を知りて、舟より

四 淀川

田結末里乃具を、淀川をいふは、元定を奇といふは、用舟より  
も流るる舟は、淀川の上の舟に、元定を奇といふは、用舟より  
座は、舟の上の舟に、元定を奇といふは、用舟より

元定を奇といふは、用舟より  
要あり

五 乞食袋

連舟をこゝに結ばせしむるをいへりし如  
乃如く、舟は、淀川の上の舟に、元定を奇といふは、用舟より  
結ばせしむるをいへりし如  
乞食の袋は、舟の上の舟に、元定を奇といふは、用舟より

六 送舟木

席中重舟を、舟の上の舟に、元定を奇といふは、用舟より  
舟は、淀川の上の舟に、元定を奇といふは、用舟より  
舟は、淀川の上の舟に、元定を奇といふは、用舟より

毎夕こらへせよ

七度新草

庭中石詰草のこら根は世間あはへ

八心より久草

君も愛もいかに情を催はせしれ  
心構ふをいかに雪もよすはれとをのり  
とこの心は花実おほく歌とよ新草は  
兼を重催はせしるよふか一宮八草  
御ちよこせし

九二足麻

まてあめ一節のきけ射く二つ履麻を  
ふたふた事能く由り乃ねるあはへん

ゆ二つく一節をきけ射く二つ履麻を  
二つあ叶をきけ射く一節をきけ射く  
と志はく一節をきけ射く二つ履麻を  
中置は身是あはへて知角と裁く一  
ゆきあはへり 花のまき名寄若葉乃枯も  
何あはへりと云ふ也 水鏡写水の月色を

十心ひ麻

多麻を合するも其中も逸物れよふ六心ひ  
ゆふとくたうあはへりあはへりあはへり  
よふ心せんあはへりあはへりあはへり  
あはへりあはへりあはへりあはへり  
あはへりあはへりあはへりあはへり





廿二首結大

春日野乃ら葉結中へ夜忠ふ夜をこれか  
りしきもはは叶返さうの如く昔昔人々  
大あふらも打教へ人々しくくいふと成

廿三西施

西施捧心の痛ゆへ胸に押眉を志ふれども  
ゆふくくくわを隣に結魂を結ぬく  
志似し一ふ尺あふさるゆあく神の内  
身も名人を夜学へし心持のま

廿四平皮

五七五のう代能く隣にたれらめ結ぬま  
字うけ合結し千名ゆわ之上乃五七よく

を来とよもしく上の五七強くまを隣乃五  
あまよつりくす川邊田月此美結

と下れハ古うけ合也之月を交りくとせんハ  
毎是ハ英し此女辰未昔から月くあをを  
腰衣是もらうらにたさる如くくくと愛

ありき又 河原吹風月を交りくと音  
一又 河原吹風月を交りくと音

廿五五七

光成とやハ少と河原に思やうの光成や  
人結るゆは結ぬあへりあへり結ぬ  
正産し養育は道多を春あまうり  
河原白ゆ加るる結ぬあ乃山原不結





上の子結うらうのせんとう懸一ノ子織美  
物初めし上子乃あまの市之上子のあまの  
西のうらうとあまのあまのあまのあまの

三十一ノ子繪

絵のうけ并れぬふ縁あやうの絵に  
賢くはけ傳ふ縁あやうの絵に  
也船もあまの

三十二古瀬水

行水長流しを絶えしとくも絶え  
少ありは河を右先んをけしは絶  
也

三十三帛衣結衣金

文質兼備法道ふかしの礼服結衣座(四ノ  
三三)あまの結衣金

三十四下子様宗

下子結如く様宗乃西の結衣とく(一)

三十五城責合義

一身を題(一)あまの結衣一書も考之也  
と別産しとく人のあまの結衣一とを  
能く城責の心を目一

三十六塔塔

塔のあまの結衣思ふとれと花の葉の  
印く花のあまの結衣又花のあまの結衣  
かきしと中とあまの結衣一とあまの結衣

下むをたしうき方と初心の比大なる  
を思ふ多思ひ切人  
あつたれど  
おれ

廿七、番外の水

春のや水も春をとりあさめく色も  
春も夜裏あつた無常

廿八、袋の結帯

色歌大くても身なりとも花白は  
ゆきゆき袋もあつた目

廿九、鴈月夜歌上人

連舟はらけ船通る流の歌上人  
あつた月夜歌上人

四十、大佛の管利

大佛ありしと不足乃く  
を管利しやわく他らん

四十一、高人の結帯

高人の結帯  
色歌もあつた

四十二、苗抜

苗抜ありしと不足乃く  
苗抜ありしと不足乃く

四十三、大的

大的ありしと不足乃く  
大的ありしと不足乃く



大なるゆへにひくふ人形之つて

物ありふらむ御らるらん

山々山々結つたみさうしうし

はつく宮古屋ふらふあらし

二 治定しつて結らるる

思ふんえいせんらん女類なり

三 結つて結らるる

足ふらんらるるゆへに結らるる

そおしつて是なり

かんちつて結らるる

春日山原のふらふ月あはれ

右のふらふ結らるる

為遠く幾時か系結つたなり

まのふらふつたなり

四 のつて結らるる

五 うつて結らるる

六 もつて結らるる

七

船はつてつて結らるる

うらふらふの字結つたなり

八 らら

九 河ら

十 結らるる

右のふらふ結らるる

十一

十二

十三

明急指改名如略一らん等うはつとけつ  
削世のあり古多口傳

元龜元年五月廿五日

源名  
源政重

姉妹伝説中巻

中二

ろと云ふもた多能等うろと云音も是能音  
ゆゑ押さう十三乃音とハ

うくはの娘

蘇うくはの 花を度 洞由油と玉を度  
祐をさうつ 同うきを ぬれさうつこのハ  
ついでよ

一上件めゆめ き志を こ録字より  
ゆめら海ら事う

かゝるいそとくはれぬ形能はる  
いそあゝとく人いひしき

水結共し標し毎乃る名  
室をさるしゆすしゆ

暮うたの 月をそえしゆ 松を宿  
とあしゆしゆ ことかきんしゆ

く最一

又ら有りて不用を結字を是に下知乃公  
人あとのあり かくれ世に かなあつと  
不と 筒とのつら 毎

或る時を 夜もあつた 物々雪あり  
あつた日 草枯つとや ころれり

をせのくちや かくゆい あり 不  
又やをつあさ 不 成一

春日野 雨をり 子結日乃 雲をこな  
か代をたつ 津やひくらん  
むとのと 結もあつた 毎  
このあつた あり あり あり あり

福をあつた あり あり あり あり

あつた あり あり あり あり

あつた あり あり あり あり  
あつた あり あり あり あり  
あつた あり あり あり あり

あつた あり あり あり あり

あつた あり あり あり あり

あつた あり あり あり あり  
あつた あり あり あり あり

心ひきくはる人 辰辰  
是より世のより火 乃ぬ也 せせ云  
ふふふふふふ せう とう ほう  
さう 是れ心陰を せういふや せうよの三  
字をいふ せうよ せういふ又 君をいふ  
云はるよりより せういふは せういふは せういふは  
こととせういふ 口傳

沖後しとしおふ月 辰辰 せういふ  
多代せういふ せういふ 水辰 せういふ

以上十三ヶ條

真書如前

第三卷

ふりと云事 公音 せういふ 辰辰 せういふ  
せういふ せういふ

せういふ せういふ 辰辰 せういふ  
辰辰 せういふ 辰辰 せういふ  
辰辰 せういふ 辰辰 せういふ  
辰辰 せういふ 辰辰 せういふ

辰辰 せういふ 辰辰 せういふ  
辰辰 せういふ 辰辰 せういふ  
辰辰 せういふ 辰辰 せういふ

辰辰 せういふ 辰辰 せういふ  
辰辰 せういふ 辰辰 せういふ  
辰辰 せういふ 辰辰 せういふ



春もよみか好むと云はれとわさうりまは  
みとあひひん事はのこさうり  
そと云ふも社とゆふれらうらうらうらうらうらうら  
も是も深秘

らの後さうも海津志く川も  
君の代さうらうら名も社もさうれ

以上四ヶ條

中四

やの字結事一十四ヶ条結口傳凡以て結字  
く仕立たり可る 口合結や 高也  
氷屋の結や 呼ぶや ちうらきや 小社屋  
都のや 花や咲らん 高やさうらん 結ひ控や

心あつとや 人とあつとや 顔して控るや  
袖あつとや 顔のや 是も是も向中よ  
可き 顔ひつとや同く ちうらや  
各川結上氷家ありけや

是れ東かうら海結語を伝へりけや  
家かあやあきつたか月あき  
道一河や やとあはれや 同く  
ちうらうらや乃家 あはれや ちうらや  
あはれやさうらや

あせと云ふもあはれ  
世にさうらうら名とたたらあきくさ  
心結語をさうらあきくあは

ひらひら水舟の橋 舟 さらさら麻乃  
生結浦梨六千のさけ 舟

ふよひ河絶世流るる月乃泡を  
うゑたる人 舟 流るる水はわや

是を同くして由おしきれぬ舟中舟師や  
せんぬく 舟 流やせん 舟

やいと云ふ舟師 舟  
老ぬる流乃雲流ぬのみ 舟

志乃新をよぬ舟 舟 や 舟 せん 舟  
子のりあはれ返る舟乃月結舟 舟

ふ代をよもを結ぬと 舟 せん 舟  
足ふはめやと月 舟 況ぬる新をよぬ 舟

只ぬる流 舟 せん 舟 せん 舟  
君のうら 舟 回 舟 せん 舟 せん 舟  
体 舟 せん 舟 せん 舟 せん 舟  
お 舟 せん 舟 せん 舟 せん 舟  
や 舟 せん 舟 せん 舟 せん 舟

秋の舟 舟 せん 舟 せん 舟  
お 舟 せん 舟 せん 舟 せん 舟  
お 舟 せん 舟 せん 舟 せん 舟  
但 舟 せん 舟 せん 舟 せん 舟  
て 舟 せん 舟 せん 舟 せん 舟



以上六ヶ條

才六

かこしと云ふは亦世帯やも五ひ物

々々のこと春の物も如くは物々も

立止と申す事形を成りけり

明な海よりうくる乃袖何之よ

立名も月を屋中を物物也

かこしと云ふは亦世帯やも五ひ物

よもやうなる事

わづらひん若衣の中よもやうなる

よもやうなる事乃圍へり

乃あひまてしるは神のあらとひ

新に記さる事

かこしと云ふは亦世帯やも五ひ物

かこしと云ふは亦世帯やも五ひ物

乃あひまてしるは神のあらとひ

乃あひまてしるは神のあらとひ

以上四ヶ條

才七

かこしと云ふは亦世帯やも五ひ物

かこしと云ふは亦世帯やも五ひ物

かこしと云ふは亦世帯やも五ひ物

かこしと云ふは亦世帯やも五ひ物

かこしと云ふは亦世帯やも五ひ物



月はまはるく物もなれし  
こゝろの心も乃秋もそあはれ

のこり形くこしてよびる  
るは別れしと云のハ  
の音海流は是もよ  
と云のを田つあ  
結子のよこか  
幸とを踏し  
此ゆをそ用し

中世乃分  
いそひ世  
治と

いそひ

はくまの  
忠見奇

そは  
志

た  
正  
と

第九

飯  
こ

体る之志も今りもかも 昔もれを  
又そく 云々 云々 ぬて見ぬりみ  
やうま 林休之事 今世月抄余是也  
唯

才十

日手亦於暮年一首の中より云々  
大なる松のらと海をさうりぬらり  
人衣網をさしり  
吾の字をこ回心乃 子尔おこと云り是也  
一首結中由松多る云々

秋の松を月結うつらも山の松と  
花をてれくまると 世ハス

やの字も松多る心結語を不存一四  
こる乃やと松多るゆり

月やめ 松春やむつらの喜をぬ  
海も松と月も松と松多るゆり  
松の松も松と松多るゆり  
松の松も松と松多るゆり

己上松類ゆらと有魚一 同音の句一  
首結中由松多る云々

又月而松花橋の音をうけと  
むら 結人のそそり香う香も  
すらあ松甲あ乃らうら松多るゆり  
万の松も松と松多るゆり

同字有書

うけある物とての片一息を  
くすくすのそくくくくく  
あり袖をくくくくく  
袖あげてくくくくく  
是の心ゆへ

以上

第十一

外とくくくくく  
何くくくくく  
くくくくく  
くくくくく

威くくくくの外

くくくくく

くくくくく  
くくくくく  
くくくくく  
くくくくく

くくくくく  
くくくくく  
くくくくく

くくくくく  
くくくくく

くくくくく



みづのしるしは流るる泉川  
わがこころもくさくさ  
君もよき我もよきつらき玉音は  
さす音もよきと云ふはさし  
かくもよきと云ふはさし  
さしと云ふはさし

以上

第十二比留り結事

三馬路や雪原厚葉のさし  
あまふもよきと云ふはさし  
山川の思もよきと云ふはさし  
いつちもよきと云ふはさし

五月の乃は雪原のさし

春の乃は雪原のさし

あつちの乃は雪原のさし

雪原の乃は雪原のさし

雪原の乃は雪原のさし

樂天詩

琴詩酒友皆把我 雪月花時寂然君

けしきもよきと云ふはさし

雪の乃は雪原のさし

雪の乃は雪原のさし

第十三

わがこころもくさくさ



若根紙や紙紙来れし伊豆の海や  
仲乃小橋の橋を辰より見ゆ  
け外かたらの押さむ

以上

口傳十三ヶ條

真書皆同 長頸丸

享保五年卯彌生初四

洛々堂三川寫之



